



# 時代を繋いでそこに 御成橋

市内には、狩野川に架かる橋が8本あります。その中で最も古いのが下流側から数えて3番目の御成橋で、その歴史の始まりは144年前まで遡ります。

明治9年、御成橋の前身となる木製の港橋(湊橋)は市内で初めて狩野川に架かる橋として開通し、それまで舟で対岸へと渡っていた人々の暮らしを便利にしました。しかし、洪水による破損や流失を繰り返したため、明治45年に県東部初の鉄橋として改築され、大正元年に名を「御成橋」と改めました。その後、交通量の増加などの理由から、昭和12年に新たな鉄橋に架け替えられ、現在のアーチ型の橋となりました。沼津大空襲を経験した橋には、今でも爆撃によりできたくぼみが確認でき、その傷跡は私たちに戦争の惨禍と平和の尊さを伝えています。

昭和初期に伊豆へと向かう観光道路の象徴的地点として再建されたことから、歴史的建造物の保存を目的とした、土木学会の選奨土木遺産に認定されており、市内外ともに認める沼津市のシンボルとなっています。夏の花火大会では橋の両側に花火が上がり、冬の出初式では、消防車による一斉放水のアーチが橋に重なります。夜は一年を通してライトアップされ、市街地の明かりとともに美しい夜景を演出し、沼津を代表する景色として街に溶け込んでいます。

御成橋は井上靖の自伝的小説「夏草冬濤」にも登場するほど、昔から人々に親しまれる存在でした。橋上で立ち止まり、昔の人も見ていたであろう沼津の街並みや狩野川の雄大な流れを眺めていると、変わりゆく時代の中でも、同じ場所から同じ景色を見られることにノスタルジーを感じられることでしょう。

明治初期に開通してから今日まで、私たちの生活を支えてくれている御成橋。人や物の往来により街を繋いでくれるだけでなく、過去と現在を繋ぎ、未来へと続く時代の架け橋でもあります。

日常的な活動が段階的に戻る中で、今後は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の第2波・第3波を防ぐことが重要となります。感染の拡大防止と日常的な活動の両立を図っていくためにも「新しい生活様式」を意識した生活を心がけましょう。